

# いつの時代も地域

## 第1期 創設期 ～設置をめぐる

小樽商科大学は、全国第5番目(東京・神戸・山口・長崎)の官立高等商業学校として、1910年に設置されました。高商設置は、北海道開発の一貫として1905年に計画されましたが、有力候補地であった函館との間で激しい誘致合戦が繰り広げられました。しかし、12,000坪の敷地と20万円の建設費の寄付という地元小樽区住民の一丸となつての活動の結果、設置が実現されました(当時の小樽区年間予算は約30万円)。

創設期の10年間には、会社・個人を問わず外部の人々から援助が寄せられ、学生の助成制度の整備・図書館の充実が進められました。

また1920年には、学生が商業実践を

行うための「実践工場」が設置されました。教官の指導のもとに学生が仕入・製造・市場調査・労務管理・原価計算などの実務を担当していました。ここで作られた製品は「高商石けん」として親しまれ、教育面のみならず経営面でも成功を収めました。

このように順調な発展を遂げていたこの時期、教官・学生・同窓生を中心として、第1回目の大学昇格運動が起こりました。残念ながらこの段階での昇格は実現されませんでした。同窓生の中に絆が生まれ、後の第2回昇格運動(1937年)、第3回昇格運動(戦後)に繋がってゆきました。

以上のような多方面からの協力によって、この頃の小樽商科大学は、特色ある商業専門学校としての実績を積み、次第に発展を遂げてゆきました。

## 第2期 種蒔期 ～外国人教師

創立の1911年より校友会が設けられ、そこに運動部・武道部のほか学芸部が設置されました。1913年3月に、校友会文芸部に所属する編さん部(当時は雑誌部)が『校友会雑誌』を創刊しました。同部は1925年6月に学生新聞『緑ヶ丘』を創刊しました。これが我が国最初といわれる学生新聞の誕生でした。この創刊に併せて発行回数を年1回に減らしていた『校友会雑誌』は、1929年以降誌名を『緑丘学人』と改称し、学生の研究発表と文芸発表の場となりました。

この頃は学内の文芸活動が盛んに行われており、高浜虚子氏の来訪を契機とした俳句創作活動の隆盛がありました。また1926年4月には、学内サークルであった文芸研究会の有志の手により文芸雑誌『北方文芸』が創刊されました。この当時 本学に在籍していた校友の中には、高浜年尾氏・小林多喜二氏・伊藤整氏らがいました。

運動部の活動を支援するためには、山上グラウンドが建設されました。この建設は、1925年6月に着工しましたが、教職員・学生の労力奉仕と同窓会の財政援助によって自力で行われました。



## 商大90年のあゆみ

1899(M32)年 高等商業学校設置の要望  
小樽区会の誘致活動が盛んになる

1905(M38)年 日露戦争 終わる

1907(M40)年 第五高商の小樽設置が決定

1910(M43)年 小樽高等商業学校 設置 日韓併合

1911(M44)年 3月29日 第1回入学試験  
5月5日 新入学生による宣誓式(開校記念日)

1912(M45)年 農大(現北大)との野球試合(以後春秋の定期戦を開催)

1917(T6)年 ロシア革命

1918(T7)年 シベリア出兵 第1次世界大戦終結  
この秋 第1次大学昇格運動が起こる

1919(T8)年 香村秀太郎氏より奨学資金として金10,000円の寄付  
これを基に学資貸与内規を制定

1920(T9)年 実践工場の建設

1923(T12)年 関東大震災

1925(T14)年 治安維持法制定  
6月 学生新聞「緑ヶ丘」第1号発行  
10月 軍事教練反対事件 起こる

1928(S3)年 普通選挙実施

1931(S6)年 ゼミナール制開始 9月 満州事変

1932(S7)年 5.15事件

1936(S11)年 2.26事件  
10月 昭和天皇御来校

1939(S14)年 第2次世界大戦 はじまる

1941(S16)年 本学同窓生 栗林徳一氏(第5回卒業生)より研究室・学生会館の寄贈

1944(S19)年 4月 小樽高等商業学校を小樽経済専門学校に改正  
1951年 廃止

1945(S20)年 第2次世界大戦 終わる